

鎌倉淡青会公開セミナー@鎌倉商工会議所

2018年 第5回 11月28日

演題：「島国マダガスカルの生活文化」

講師：東京大学大学院総合文化研究科教授 森山 工

講師は1988年から1991年の3年間マダガスカルに住み込み調査をされ、その頃の文化事情について講演いただいた。

I マダガスカル

マダガスカルは、インド洋西域に位置し、面積はおよそ59万平方キロで日本の約1.6倍ある。さまざまな文化が混ざりあっている。動植物についても独自の種があり特異な地域である。東南アジアの島嶼部(オーストロネシア)の文化要素を基盤とし、バンツー系(ブラックアフリカ)、アラブ系、ヨーロッパ系の文化要素などが加わる。文化の源は東南アジアの島嶼部にあり、いつの時代か東南アジアの島嶼部から人が移住してきた。しかし移住経路は、インド洋直行経路説、陸地伝い説、その中間のインドの南端またはスリランカ経由の直行経路説等の説があり、決着はついていない。

II マダガスカル文化の統一性と多様性

文化的統一性は、オーストロネシア語族に属するマダガスカル語の単一の言語を持つことである。方言はあるが北と南の人たちが出会ったときに意思疎通はできる。もうひとつは稲作が卓越していることである。稲の品種は、東南アジア島嶼部由来のインディカ、ジャバニカが栽培され、栽培技術の点でも東南アジア島嶼部由来の水田稲作、森の中では焼畑がおこなわれている。これらはマダガスカルの全島で見られる。

文化的多様性は、細かく見ると地方間の方言差があったり、稲作よりも牛の牧畜に重点を置いている地域があったりすることである。

米国の人類学者ラルフ・リントンが1920年代にマダガスカルを調査し、マダガスカル文化を3つの文化領域に分けた。エリア1は、東海岸部で東南アジア系統の稲作がおこなわれ、エリア2は、中央高地部でやはり東南アジア系統の稲作がおこなわれている。エリア3は、西岸部・南部でブラックアフリカの影響が強く、稲作のほかにトウモロコシ、イモ類を主食にし、牛の牧畜が重要な役割を果たしている地域がある。

人々の姿形は東南アジア系とブラックアフリカ系が混じりあっている。

III 島国マダガスカルの生活文化

首都がアンタナナリヴという町で、その北北東にアラウチャ湖というマダガスカル最大の湖がある。その周辺は盆地で主に民族名でシハナカと呼ばれる人々が居住する。湖の周辺は、稲作の

生産性が高いことが期待され、植民地時代から耕地の基盤整備が行われ、独立後も農業開発事業が引き継がれて、マダガスカルのみ倉と呼ばれている。

18の諸民族が分布するが、その境界は概念的なもので人の移動は多い。この中のシハナカは講師が調査した地域である。シハナカは丘のシハナカと水辺のシハナカに大別される。

メリナという民族が19世紀にアンタナナリヴを中心に王国を確立した。その勢力拡大の中でシハナカはメリナの征服下になり、メリナの人々がシハナカの丘の上に入植し、村を作った。もともとのシハナカの人々は湖の岸辺に村を作っていた。生活空間は別れるが、人の移動は激しく、丘のシハナカと水辺のシハナカの人たちの間の結婚はごく普通である。

季節のリズムは、11月～4月が雨季で農繁期であり、水田稲作に従事し、5月～10月が乾季で農閑期であり、雨季の収穫物を一部現金化し、それを投資してさまざまなお祭りや儀礼がおこなわれる。葬儀は時期を選べないが、割礼、婚礼、棟上げ式などの儀礼は乾季におこなわれる。

この地域では水田稲作をおこない、稲作と結びついた牛の牧畜も重要である。

次からは、写真を元にした説明である。

丘のシハナカは丘の上に村がある。

水辺のシハナカは湖の岸辺に村を点在させている。雨季になると、水が村落の中まで入り込む。

丘のシハナカの村落は、レンガ作りの家が並ぶが、これは19世紀に入植したメリナの人々が建てた家で、イギリスのコロニアル様式を踏まえたものである。初期のメリナ王国はイギリスの影響を強く受けたが、その後フランスが乗り込み、最終的にフランスの植民地になった。

水辺のシハナカでは、カヌーが使われるが、カヌーは丸木船(くり船)で、東側の森の中で作られ、川筋に沿って湖まで流してくる。

湖の水は、洗濯、水汲み、トイレに使用されている。水汲みは女性や子供の重要な労働になっている。

水辺のシハナカでは野生化した猫を食用にすることがある。

マダガスカルでは家屋は南北に沿って建てられ、出入り口は西側に設けられている。南西の隅には炉がありプライベート空間になっている。北東の隅はパブリックな空間であり、来客を座らせたり、祖先を祭ったりする場所になっている。

水田は牛で田起しし、犁は鉄製である。鉄製の犁はヨーロッパからの技術である。鉄製の犁を使う以前は牛を田に追い込み、牛に踏ませて田起しをしていた(踏耕)。

田植えは主に女性がおこない、牛を扱う作業を男性がおこなう。

収穫の直前に水田の区画の北東の角で祖先に祈りを捧げる儀式をおこない、収穫を感謝し、子孫の繁栄を願う。

稲の収穫は根元から刈り取る方式で、根刈りと呼ぶ。その日食べる分を、人による棒を使った打ち付け脱穀(打穀)で脱穀する。打穀しなかった稲は水田に稲積みし、1ヶ月ほど乾燥させる。この大量の稲の脱穀は、牛のひづめで稲を踏ませて籾を脱落させることでおこなう(牛蹄脱穀)。牛を追うのは男性である。籾と稲藁の分離は女性により風選でおこなわれる。

湖では、漁撈も盛んにおこなわれ、漁網を使った投網漁や、釣り竿による釣りがおこなわれている。川ではしかけを作ってウナギ漁がおこなわれている。マダガスカルではウナギは珍重され

ている。漁撈の時期になると、一部の人たちは、湖の近くに出作り小屋を作り 3 週間程度漁撈に専念する。

女性たちは、水草から繊維をとり、染色して編んで籠等を作り、地方の市場や大きな都会の土産物屋で販売して現金収入を得ている。中にはその技術で有名になる人もいる。

鉄を打つのにマレー式の双胴シリンダーのファイゴが使われている。これは東南アジアの島嶼部との文化的繋がりを示す証拠と言われている。

森に入ったところでは、サトウキビを使った蒸留酒(ラム酒)作りがおこなわれている。乾季のお祭りではこの地元産のラム酒が盛大にふるまわれる。

収穫の時期になると収穫祭が町ごと村ごとにおこなわれる。

マダガスカルではキリスト教への改宗率が高いといわれているが、一方で祖先崇拜も盛んである。キリスト教徒であることと祖先崇拜とは矛盾なく同居している。

キリスト教は、メリナ王国ができた島の中央部にイギリスのプロテスタント教会が深く入り込み、海岸部にはフランス系カトリック教会が入り込んだ。

男の子は 2~3 歳で割礼式がおこなわれる。女の子の場合には割礼はないが、耳タブに穴を明ける。

割礼が終わった子供は窓から外に出す。これは子供としては死に、大人として生まれ変わることを示す。割礼式では母方のオジが重要な役割を担う。マダガスカルでは母方のオジはきわめて近しい存在である。

シハナカの結婚式には幾つかのスタイルがあり、主流は花婿方が花嫁方に行き、花嫁をもらって花婿方の村に戻るといった嫁取りである。マダガスカルには演説文化があり、嫁取りでは、まず花婿側の代表が演説し、次に花嫁側の代表が演説で返す。演説の内容はかなり定型である。

葬式では、お棺は窓から出される。一部の地域では、土に埋葬した遺体をあとで掘り起し、石の墓に埋葬する改葬式が現在も盛んにおこなわれている。墓にお金を投資することは、祖先に対して義務を果たしていることを公に示すためと考えられる。

マダガスカルでは祖先の墓を大事にする。祖先の墓に自分も入ることが人生の究極の目標と考える人々もいる。

近現代では人の移動が多くなっており、生まれた村で一生を過ごすことはなじまない。祖先の土地以外の場所で死亡して埋葬された場合には、親族が改葬し、祖先の土地の墓に埋葬しなければならない、これは親族の重い義務となっている。死者である間は子孫にたたるが、祖先の墓に埋葬されると死者は祖先となり、子孫を祝福し加護を与える良き存在なると考えられている。マダガスカル人にとっては祖先になることがひじょうに重要性を持っている。
